

今山八幡宮所蔵本

「建礼門院右京大夫集」の諸注集成（一）

田 中 司 郎

はじめに

本諸注集成は、『建礼門院右京大夫集』の注釈書で入手可能な諸注を検討し、解釈上における主要諸問題を総合的に集成したものである。集成した諸注は、本井田重美著『評註建礼門院右京大夫集全釈（改訂版）』、久松潜一校注『平安鎌倉私家集 建礼門院右京大夫集』、久徳高文著『建礼門院右京大夫集』、井狩正司著『建礼門院右京大夫集 校本及び総索引』、村井順著『建礼門院右京大夫集 評解』、草部了円著『世尊寺伊行女 右京大夫家集』、糸賀きみ江校注『建礼門院右京大夫集』、久曾神昇著『昭和美術館蔵 伝津守国夏筆 建礼門院右京大夫集と研究』、今井卓爾監修『建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むぎが記』、「宮崎女子短期大学紀要 第十六号 今山八幡宮所蔵本 建礼門院右京大夫集 翻刻 共同研究 後藤多津子 田中司郎 塚本泰造 原田真理」、大原富枝著『建礼門院右京大夫集』、久保田淳校注・訳『建礼門院右京大夫集』、久保田淳監修 谷知子校注『建礼門院右京大夫集』等の重要な点を摘出し、注釈上重要と考えられる諸点を集約することに終始した。諸賢の厳しいご批評を賜るならば幸甚の至りである。

凡例

本書の本文は宮崎県延岡市今山八幡宮の宝物として保存されていた今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』を底本とし、群書類従

所収本、細川家旧蔵九州大学図書館所蔵本、宮内庁書陵部所蔵本、彰考館所蔵本、静嘉堂所蔵本、無窮会神習文庫所蔵本、吉水神社所蔵本（下巻闕）、内閣文庫所蔵本（下巻闕）、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、昭和美術館本等を参照した。

1、本文は「宮崎女子短期大学紀要 第十六号 翻刻」を使用した。
2、諸注の引用は重点的にあげ、同説は一括して示した。引用に当っては、著者名の敬称を敬称させていた。異説のあるものは、そのまま示した。ときに語法、解釈、用例、鑑賞等にもふれ、簡要を期して記した。

3、文法は、主要な問題にとどめた。

4、口語訳は口語訳探求に資するために、異訳を補入した。ここに原著者に対し、非礼を深くおわびするとともに、ひとえにご許容を乞う次第である。

5、詞書は和歌より二字分下げて書かれ、和歌は上の句と下の句とを二行の分ち書きにするが紙数の都合で詰めて掲載した。

6、本文中の「書き入れ」は、「宮崎女子短期大学紀要 第二七号・二八号・二九号・三〇号に掲載したので本諸注釈では割愛した。

本文

家の集なといひて歌よむ人こそかきと、むることなれ是はゆめくさにはあらすた、あわれにも悲しくもなにとすれはわすれかた

くおほゆることゝものあるをりくふと心におほえしをおもひ出らるゝまゝに我めひとつに見んとて書きをくなり

一 われならてたれかあはれとみつくきのあとしすゑの世につたはらは

諸注

家の集―ある個人の作品を集めた歌集。「貫之集」「和泉式部集」「山家和歌集」のようなもの。作者自身が選んだもの（自撰集）と他人の手で撰ばれたもの（多撰集）とがあるが、この当時は精選して後代に残すために家集を編纂することが多かった（本位田）。個人の詠んだ和歌を、自撰（藤原俊成『長秋詠藻』など）や他撰（『貫之集』『伊勢集』など）で集めた歌集（糸賀）。家集。個人の歌を集めたものであるが、作品として認識され、公的性格を持つ（石川）。歌よむ人―所謂歌人。歌よみとして世間からも認められ、みずからも許している人（本位田）。この時代には、歌のじょうずな人と世間から認められている人をさす。右京大夫も歌合などの席に出ているから、この表現は謙遜である（糸賀）。歌人。この時代では、歌合や歌会などに参加し、創作的な歌を詠む人が歌人とみなされた（久保田）。かきとゝむることなれ―文中にある「こそ」…已然形、の形の句は、逆接条件句として用いられる。書き残すことだけれども（本位田）。是は―次に書きつけられた文章は（本位田）。この集は（糸賀）。ゆめく―決して決して。被修飾語は、「あらず」。この副詞は、このように下に打消が来る（本位田・村井）。ゆめくさにはあらず―決して決してそんなものではない（久松）。この集が作品として公開されることを意図したものではなく、あくまで私的な性質のものであるという意（石川）。あわれにも―「あはれに」は感動を表す形容動詞。うれしい時にも悲しい時にも、また、

風雅の場合にも用いる。ここは「あはれにも」で、「身にしみて感じたり」の意。なお、「あはれにもかなしくも」という連用修飾語は、「おほゆる」にかかる「村井」。今山本の「あはれにも」の「わ」の表記は「あわれにて」（七八の詞書）など、一一五の詞書、一九二の詞書、二二〇の詞書、三三四の詞書にも見られる。しかし、「わ」の右横に「は」の書き入れがある。『下官集』に「あはれひみ」、『仮名文字遣』に「あはれむ 憐 愍 矜」とあり、九州大学図書館所蔵本も「あはれ」であるからこれが拠り所と思われる（宮崎女子短期大学紀要 第二七号 今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書入れ（二）三二ページ）。すれは―墨筆による二点のミセケチが見られる。「なにとすれは」では前後の展開が円滑でないから今山本は「なく」を書き入れたと考えられる。昭和美術館所蔵本は「なにとなく」であり、諸本と今山本の書き入れは一致している。おほゆることどものあるをりく―思われるさまざまのことが折にふれて（糸賀）。我めひとつに見んとて―自分一人だけで（村井）。自分の目だけ（自分一人）で見よう（他人に見せることなどは考えない）（久保田）。自分一人で見よう。三五七の詞書「これはたゝ我が目ひとつに見むとて」にも見える言葉。「家の集など」から「書をくなり」の箇所は、序文に相当する部分で三五七（碎きける思ひのほどの悲しさも書きあつめてぞ知らるゝ）と呼応する。「我が目ひとつに見ん」と言いつつも仮想の読者を求める心情がほの見える。そしてその読者に対して、歌の出来不出来といった文学作品としての価値基準ではなく、個人的な体験を綴ったこの集を共感と共に読んでほしいと願っている（石川）。本書の序にあたる部分。先行する男性の家集の序に見られるような肩肘いからせた姿勢ではなく、あくまでも私的なものであつて公的のものではないとい

う態度を明らかにしている。『伊勢集』（平安時代中後期成立）の冒頭の発想に近い（久保田）。みつつき―手跡。筆跡。「あはれと見ん」の「見」とかけている（本位田）。「みつ」に「見」をかけてある（久松）。「みつ」と「あはれと見（む）」とをかけてある（糸賀）。ここでは、「水」に「見ず」をかけている。（村井）。筆跡。手跡。「水荃」の「みつ」に「見」を掛ける（久保田）（石川）（糸賀）。世につたらは―もし後の世に残ったならば（糸賀）（石川）。もし後の世に伝わったとしても（村井）。正元本「世につたはらば」。ただし、「つたはらば」では上の句と照応しない。「世にのこるとも」の「の」、「こ」が草体の「た」、「る」が「ハ」、「とも」が「らは」にそれぞれ誤読されたのであろう（本位田）。

口語訳

家集などといって、歌よみは歌を書き残すものであるが、これは決して決してそういう性質のものではない。ただ身にしみて感じたり、悲しく思ったり、何となく忘れにくく思うことがある時々、ふと心を感じたことを、思い出されるままに、自分一人で見ようと思っ

て書いておくのである。

書いた私の当人でなく、いったい誰がわたしだけのこの世の記念などしみじみ見てくれるだろうか、いま書きとどめる歌草がもし後の世に残ったならば。（村井順 評解・糸賀きみ江 頭注・久保田淳 現代語訳による。）

本文

たか倉の院御位のころ承安四年などいひしとしにや正月一日中宮の御かたへ内のうへわたらせ給へりしおほんひきなをし御すかた宮の御物のくめしたりし御さまなどのいつと申なからめもあやにみえさせたまひしをものゝとをりより見まいらせて心におもひし

こと

二 雲のうへかゝる月日のひかりみる身のちきりさえうれしとおもふ

諸注

たか倉の院―高倉天皇。第八十代の天皇。後白河天皇の第五皇子。御母は建春門院。仁安三年（一一六八）即位。御年八歳。治承四年（一一八〇）二月、言仁親王（安徳天皇）に譲位、翌、五年崩ぜられた。御年二十一歳。承安四年（一一七四）は、天皇十四歳の元日のことである。そして、諸先学の推定によると右京大夫は十八歳ぐらいである（村井）。諱は憲仁（のりひと）。後白河天皇の第四（第五とも）皇子。母は滋子（建春門院）（久保田）。承安四年などいひしとしにや―下に「ありけむ」を略す。作者の考えを注釈的に挟み込んだもので、地の文としては「……御位のころ正月一日」と続く（本位田）。高倉天皇の治世第七年目、西暦一一七四年（久保田）。中宮―建礼門院平徳子。平清盛の女。高倉天皇の中宮。この時御年十八であった（久松）（本位田）。承安元年（一一七一）、高倉天皇十一歳の時入内（十五歳）、翌年中宮、養和元年（一一八一）建礼門院と号す（二十五歳）、建保元年（一二二三）崩御（五十七歳）。承安四年には、中宮は十八歳である（村井）。内のうへ―主上。高倉天皇（本位田）（久松）。おほんひきなをし―普通の直衣の裾の長いもので、天皇のお召しになるものである。天皇御引直衣の時は御冠、緋袴を召させられ、蘇芳檜扇をお持ちになるのが通例であった（本位田）。「ひきなをし」は天皇・上皇にかぎり召されるもの。常の直衣に似ていて、欄を長く引くから引直衣という（村井）。天皇のふだんの直衣。裾を長く引くように着、下に紅袴をつけるのが普通（久保田）。宮の御物のく―「宮」は中宮（本位田）。建礼門院が

御盛装（唐衣、裳、表着、五衣を召すのが普通）なされた御姿（久松）。「もののく」は世にいう「十二ひとへ」のこと。女官の礼服で、男官の束帯にひとしいもの。唐衣・裳・上着・桂・打袴などを着る（村井）。「御物のく」は一揃い完備したもの。宮廷女性の晴着の正装。裳装束（略儀）の生袴を張袴に替え、重ね桂の上に打衣と表着を加えた装束（糸賀）。ご礼装。唐衣を着、裳をつけて、女性の礼装一式を「物の具」という（久保田）。いつと申なから「いつ」の下に、反語が略されているのだと思う。すなわち、「いつお見苦しい時があるやとは申しながら」の意と思う（村井）。承安四年（一一七四）正月当時の言葉というよりも、宮中出仕時代を振り返った時の言葉にふさわしい（石川）。めもあやに―見る目もまぶしいほど。「あやに」は副詞（村井）。目もくらむほど輝かしく（石川）。ものゝとをり―廊下などを指すか。物かげか（久松）。「ものゝ」は接頭語。往き来の略（村井）。通路か（石川）。雲の上―宮中。禁中（本位田）。宮中。「かかる」「月日」「ひかり」と縁語（石川）。かゝる月日―「かかる」は「斯かる」と「雲」の縁語、「懸かる」の掛詞。「月」は中宮。「日」は天皇の比喻で「雲」「光」と縁語（久保田）（村井）。ちきり―宿縁。めぐりあわせ（村井）。縁。本集に多出する語。高倉天皇・徳子中宮の光り輝くイメージによって本集は語り出される。高倉天皇全盛時代を象徴する場面として選ばれ、序文の次に配置されたと思われる。この部分は、二〇二（雲のうへに行く末とほく見し月の光消えぬと聞くぞかなしき）、二〇三（かげならべ照る日のひかりかくれつゝひとりや月のかき曇るらむ）と光と影のように対応しており、後に失われることを前提としたかのような描写である。右京大夫の出生を仮に仁平元年（一一五二）とすると当時作者は二十四歳、仁平二年の出生とすると二十三歳という

ことになる（石川）。

口語訳

高倉の院の御位において遊ばした頃、承安四年などといった年であつたろうか、正月一日、中宮の御座所の方に主上がおいでになつておられた、その主上の御引直衣の御姿、中宮の御盛装をこらしておでになつたご様子などが、いつものことは申しながら目もくらむばかりにお見受け申しあげられたのを、廊下から拝見して、心に思いましたこと、

二 自分は宮中にお仕えして、天上にかかる月と日のような天皇・皇后両陛下を拝してありがたいと思うが、そういうごりつばな両陛下を拝することのできる、自分の運命をさえうれしく思うことだ（本位田重美 全釋・村井評解による。）。

本文

をなし春宮なりしにや建春門院内裏にしりさふらはせを^はしましゝかこの御かたへいらせおはしまして八条の二位との御まいりありしも御所にさふらはせ給ひしを御くしけとのゝ御うしろよりおつくちとみまいらせしかは女院むらさきのにほひの御そやまふきの御うちきさくらの御こうちきをあをいろの御からきぬてふをいろく^ににおりたりし〇め^をしたりしいふかたなくめてたくわかくもおは〇す宮はつほめるいろのこうはいの御そかはさくらの御うはきやなきの御こうちきあか色の御からきぬみなさくらを^をおりたるめしたりしにほひあひて今さらめつらしくいふかたなくみえさせ給しにおほかたの御所の御しつらひ人く^ののすかたまでことにかゝやくはかりみえしおり心にかくおほえし

3 春の花秋の月夜をおなしおりみるこゝちする雲のうへかな

諸注

をなし春―承安四年（一一七四）の春（本位田）（久松）。春宮―諸本は「春」。建春門院―後白河天皇の女御。高倉天皇の御生母。御名滋子。当年三十三歳であらせられた。「建春門院中納言日記」に、「愛嬌こぼるばかりとかや、物語などに書きつけたるは、かやうなるにや。」とあるのをみてもそのお美しかった様子が察せられる（本位田）（久松）。康治元年（一一四二）生、安元二年（一一七六）没。三十五歳。御白河院の後宮女房小弁局の時代に院の寵をうけ、永暦二年（一一六二）高倉天皇を生んだ。仁安元年（一一六六）従二位、二年女御となり、嘉応元年（一一六九）建春門院の院号を宣下された。高倉天皇即位後は皇太后と呼ばれた（糸賀）。兵部権大輔左大臣平時信の女。母は権中納言藤原顕頼の女。高倉天皇即位とともに皇太后宮（久保田）。内裏―高倉天皇は、常に閑院内裏にお住みになり、大札のあるたびに、大内にお行きになった（村井）。「玉葉」の承安四年正月一日の条に「次下官退出、参内（裏）閑院」とあるから、この記事は閑院内裏でのことである。「閑院」は通常「かんにん」と呼ばれる。二条の南、西洞院の西、東西一町南北二町を占めて作られていた代表的な里内裏の一つであった。里内裏とは、内裏の焼亡、修理や方違、怪異などによって臣下の邸宅を仮の皇居とされたもので、期間は年余に及ぶこともあったけれども、一時的な仮りの皇居であるということには変わりがなかった。白河天皇以後はかえって里内裏が常の御所となり、行事などの場合だけ内裏に還られることが多くなった。高倉帝も里内裏である閑院御所で践祚になり、尔後ここを常の御所としておられたのであって、このことは、たとえば「百鍊抄」の六月十七日の条に「自大内還閑院、全安元元年十月九日の条に「行幸大内」とあるように「還御」と「行幸」とが逆の使い方になっているのを見てもわかると思う（本

位田）。しり―「り」に二点もミセケチが見られる。この箇所は「高倉天皇の御母である建春門院が、宮中にしばらくご滞在であったが」という意の箇所であり、今山本の「しり」では解釈できない。他の写本を見て書き入れたと思われる（宮崎女子短期大学紀要 第二十七号 今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京太夫集』の書き入れへ一〇二〇ページ）。さふらはせをはしまし、か―おいであつたが（村井）。この御かたへおはしまして―この中宮の御所（御座所）へおいでなさいまして（久松）（本位田）。八条の二位―清盛の妻時子。建春門院の御姉。中宮の御母（本位田）（久松）。清盛の室、時子のこと。後に出家して「二位の尼」という。徳子中宮の御母である。壇の浦で安德帝を抱き、海に投じた人。建春門院の姉にあたる（村井）。生年未詳。元暦二年（一一八五）没。二位殿。二位の尼と呼ばれる。堂上平時平時信の女で平清盛の妻。宗盛、知盛、重衡、建礼門院の母。永暦元年（一一六〇）従二位、翌年憲仁親王（高倉天皇）の乳母。仁安三年（一一六三）清盛が出家した際共に出家した。承安元年（一一七一）女徳子が入内した後従二位。治承四年（一一八〇）三宮に准ぜられる。平家の都落ちに同行し、壇の浦合戦の際、安德天皇を抱いて入水。母は大膳太夫藤原家範の女。建春門院の異母姉（糸賀）（久保田）。御くしけとの―「平家公達草紙（松永本）」によれば、中宮の御匣殿は前太政大臣藤原伊通の女であつたようであるが、もしそうであれば近衛帝の中宮であつた九条院皇子の姉妹ということになる。ただし、尊卑分脈に建礼門院御匣殿の名は見えない。「みくしげど」の（装束を調進する所）を受持つ上臈女房。建春門院日記によれば、花園左大臣有仁の女か（本位田）（久松）（糸賀）。あるいは源有仁の女か。有仁（一一〇三―四七）は後三条天皇の皇子輔仁親王の男。花園左大臣と号した（久保田）。貞観殿

ともいう。天皇の後装束を裁縫などする所。しかし、ここはそういう召名の女房のこと。後の「御匣殿の里に久しくおはせしころ」の段にも出てくる女性（村井）。おつく／＼とみまいらせしかは「おつく／＼」は「怖々」の意。副詞。「ちと」は「ちらつと」の意。副詞。（村井）。「おつく／＼」は「おそろおそろそつと」の意。物陰から光り輝く人びとの様子を見ている自分の姿を言ったもの（石川）。女院―建春門院。高倉天皇の生母、内親王、後宮の人たちのうち、特に院号を授けられた人。ここは建春門院をさす（本位田）（久松）（村井）（糸賀）。むらさきのほひ―「にほひ」は染色の、上は濃く次第に下の淡いもの。「満佐須計装束抄」に「五節より春まで着る色。紫の匂。上こき紫より下へうすくにほひて。」とある。「にほふ」とは、濃いものがだんだん薄くぼかされることである。（本位田）。紫匂い。上部は濃紫で下は次第に薄紫のぼかしになっている（久松）。「紫の匂い」は、その「かさね」の色目のことで、上は濃紫、下は紅。「匂い」は、上から下にゆくにしたがい、色が薄くなつてゆくのかさねること。冬から春に着用（村井）（糸賀）。御そ―桂のこと。普通かさねて着る。時には二十枚もかさねることがある（村井）。一般に衣（きぬ）の総称。ここは表着の下に着る重ね桂をさす（糸賀）。表着と下に着る襲桂とを通じて御衣というが、ここでは表着と単衣との間に着る襲桂のことを指している（本位田）。やまふき―襲の色目。表朽葉（黄枯茶）裏黄。花山吹ともいい、冬より春に着用する。花山吹とも。裏山吹・青山吹などがある。（本位田）（久松）（村井）（糸賀）（久保田）。うはき―襲桂・打衣の上に着用する（本位田）（久保田）。女官の正装の時、唐衣の下に着る物（村井）。さくら―表白、裏濃紫又は赤花。裏葡萄染（えびぞめ）。裏二藍（赤みをおびた藍色）または紫。春着用する。正

月から三月まで着用する。（本位田）（久松）（村井）（糸賀）（久保田）。こうちき―女房は唐衣・裳を着用するのを礼とするが、一家の主人筋にあたるものは、その代わりに小桂を着る。「台記別記」に「着唐衣之時、不着小桂、着小桂之時、不着唐衣、是礼也。」とあつて、唐衣と同時に着用しないのが例であつたようであるが、この当時から礼装として小桂の上に唐衣を着することもあるようになったらしく、「増鏡」などにもその例が見える。婦人の礼服（本位田）（久松）。大桂に対する語。大桂は祿としていただくための物だが、小桂は婦人の正装の時、表着の上にかけて着た（村井）。重ね桂の上に着る桂。桂の裾を短く仕立てたもの（糸賀）（石川）。女官の日常の服。中礼装とする説も。下に打衣と単衣とを重ねて着る（久保田）。あをいろ―翹塵のこと。萌黄色（薄緑）の黄ばんだ色。禁色（勅許なしに身につけられなかった装束の色の一つ）（村井）（糸賀）（久保田）。からきぬ―礼装のとき、表着の上に着る。短い服で、身の前は袖丈と等しく、後は袖丈より短い。女房が常に唐衣・裳を着るのは、常に主人の前に侍しているからである。錦、綾で作り、袷で五衣の上に着る。婦人の正装の時、一番上に着るもの。唐朝の服装を模したから唐衣という。地質と色とは位階による制限がある（本位田）（久松）（村井）（糸賀）（久保田）。てふをいろ／＼におりたりし―唐衣の模様に蝶が色々に織つてあつたのだ（村井）。いふかたなくめてたく―いいようもなく美しく（久松）。「めてたく」はすばらしく。形容詞・連用形（村井）。宮―中宮徳子（村井）。つほめるいろのこうはいの御そ―薔紅梅の御衣。表紅梅、裏蘇芳（黒みをおびた赤色）。春の初めに用いる（本位田）（久松）。冬から春に着用（村井）（糸賀）。五節のころより正月半ばまで着用（久保田）。かはさくら―表蘇芳、裏赤花（紅色）。春着用

する。襲の色目（本井田）（久松）（村井）（糸賀）（久保田）（石川）。やなき―表白。裏青（薄青）。冬より春まで着用する。五節より春まで着用（本位田）（村井）（糸賀）（久保田）（石川）。みなさくらをおりたる―表着にも唐衣にも桜の模様が織つてあつたのだ（村井）。にほひあひて―色美しく映え合つて（本位田）（久松）。表着の色と、下の色とがうつりあつて（村井）。「匂ふ」は色つやが美しくはえる、の意（久保田）。お互いの色が映え合つて（石川）。おほかた―「おしなべて。あたり―帯」の意（本位田）（久松）。しつらひ―寝殿造の広い板敷に間仕切りをして、居間としての形をととのえるための設備。御所のかざりつけ（装飾）。御簾、几帳、壁代、屏風、厨子、畳のようなもの（本位田）（久松）（村井）（糸賀）（久保田）（石川）。人く―女房たち（石川）。

口語訳

同じく承安四年の春のことだったか、建春門院が宮中にしばらくご滞在であつたが、中宮御所へおいでになり、八条の二位殿も宮中においてであつたが、やはり中宮御所にいらつしやつたのを、私がうしろからこわごわ、ちらつと拝見すると、建春門院は紫匂いの御桂、山吹の御表着、桜の御小桂、青色の御唐衣の、蝶を色々の模様織つたのを着ていらつしやつたので、何ともいえづりつぱで、また、若くもお見えだった。中宮は蕾紅梅の御桂、樺桜の御表着、柳の御小桂、赤色の御唐衣、すべて桜の花を織つたのを召されていたが、着物の色がうつりあつて、常に見なれてはいるものの、今さらながらりつぱで、何ともいえずお美しくお見えだった。また、おしなべての中宮御所の御装飾、ならびに、女房たちの姿も、格別に輝くほどに見えた時、心にこのように思った。

三 春の咲き匂う桜花、秋のさやかに澄む名月を同時に見るような、

すばらしい宮中でございましたこと（村井順 評解、糸賀きみ江 建礼門院右京大夫集、久保田淳 建礼門院右京大夫集による。）
克明な衣装の描写と観念的な賛辞の歌とがややちぐはぐな印象を与える。二の詞書は「ものとはより見まゐらせしかば」と、自分分は少し離れた所からこつそり見ていたということを繰り返して書き記している。光り輝くものと自分との距離を強調しておきたかったのであろうか（石川）。

本文

頭中将さねむねのつねに中宮の御かたへまいりてひはひきうたうたひあそひてとき／＼ことひけなといはれしをことさましにこそとのみ申てすきしにあるを^おりふみのやうにてた／＼かくかきておこせられたり

四 松風のひ／＼きもそへぬひとりことはさのみつれなきねをやつくさむ

かへし

五 よのつねの松風ならはいかはかりあかぬしらつに^へねもかはさまし

諸注

頭中将―近衛府の中將で蔵人頭（天皇に近侍し、伝宣その他宮中の雑事を掌る蔵人所の長官）を兼ねているもの。西園寺実宗。按察大納言公通の嫡男。嘉応二年（一一七〇）蔵人頭。安元二年（一一七六）参議となる。当時琵琶の第一流の名手で妙音院藤原師長の弟子（本位田）（久松）（村井）（糸賀）。ひは―弦楽器の一つ。木製で楕円形の平らな胴があり四、または五弦で膝にかかえて撥で絃を弾く。（糸賀）。あそひて―管弦のあそびをして（本位田）。こと―琴、箏、琵琶などの絃楽器。ここは十三絃の箏のことであろう（糸賀）。こ

とさましにこそ興がさめること。「こそ」の下に「あらめ」が略されている。興ざめでございます。「ことさまし」は複合名詞。「に」は断定の助動詞「なり」の連用形。「こと」に「琴」をふまえてしゃれたのだ。けれどもじつさいは作者の母が名人だったから作者も巧みだった。『奏箏相承血脈』にもその名が見えている。この掛詞はしばしば用いられる（久松）（村井）（糸賀）。ふみのやうにて―手紙のようにして（本位田）（久松）。松風―琴の音にたとえてある。琴の音を松風にたとえることは「拾遺集」雑上「野宮に斎宮の庚申し侍りけるに、松風入夜琴といふ題をよみ侍りける 斎宮女御「琴の音に峯の松風通ふらし何れのをよりしらべそめけむ」「松風の音にみだるる琴のねをひけばねの日の心持こそすれ」とあるごとく、古くより行なわれている。（本位田）。琴の音色を松風に譬えるのは、漢詩に多い比喩。「第一第二絃索 秋風松疎韻落」（「五弦弾」『白氏文集』卷三・『和漢朗詠集』管弦）（糸賀）。ひとりこと―「こと」は糸の楽器で箏、琴、琵琶等をさした。宇津保物語吹上の上に「うへ琵琶の御こと」とある。ここでは詞書に「びはひきうたうたひ」とあるから、琵琶をさしている。独弾の琵琶（久松）。さのみ―ここでは反語をともなつて、「なのにそう一概に」という意に用いられる。そのように。「さ」は副詞。「のみ」は副助詞。（久松）（村井）。つれなき―無情で寄り付けないということからさびしいという意である。「連れ無き（伴奏がない）」をかける（久松）。よのつねの―世間並みの（石川）。松風―実宗の歌を受け、ここでも自分の音の意に用いる（石川）。あかぬしらべ―実宗の琴の音を指す。（石川）。音もかはさまし―上の仮定形と呼応して、反実仮想となる。人並みの腕前ではないからあなたと合奏できませんでした（石川）。作者の父母は琴の名手として知られていた。またこのよう

に琵琶の名手である実宗から合奏を誘われていた作者もかなりの腕前であつたと思われる。このエピソードは作者の自尊心を満足させるものであつたにちがいない（石川）。頭中将実宗は当時第一級の琵琶の名手であつた。「琵琶血脈」に「妙音院太政大臣師長公―実宗卿」と載せられているのを見ても、その技倆の程が察せられるのであるが、彼が若くして世にすぐれた名手」であつたことは、六条天皇の仁安二年法住寺殿の朝觀行幸の御遊に弱冠二十三歳をもつて琵琶を弾じているのを見れば理解できる。すなわち「御遊抄」に「比巴 右中将実宗朝臣。権大師長 妙音院相国記云。比巴授予。々辞申之。右中将実宗彈之。」と見える。弱冠わずか二十三歳で、古今の名手といわれたその師妙音院師長に代わることできた実宗は、やはり稀に見る名手であつたと言わなければならないであろう。ところで右京大夫の母は、八幡の樂人大神基政の女夕霧であつた。基政については「懷竹抄」「古事談」「続古事談」「古今著聞集」「教訓抄」等に伝えられるおびただしい逸話によつて、その音楽に関する技倆識見が察せられるが、その女の夕霧も當時有名な箏の名手であつて、「奏箏相承血脈」に、「我駒―前因幡守教高―夕霧 右大臣雅定女房 大進大神基政女 又習我駒―受俊賀説―或志良末久弟子云々」と見え、教高、我駒、俊賀、志良末久などの教えを受けたと伝えられている。「絲竹口伝」に「夕霧ト云ハ八幡ノ樂人大神も基政ガ女ナリ。此夕霧ニ父ガ笛ノ骨ヲ以テ探リテ私ニオシヘケリ。師長公ヘ具シテ参リ。コノ女ニ箏ヲ探リテ訓ケルアイダ。キコシメサレヨト云ケレバ聞食シケリ。笛ノ詞ナル故ニ呼吸吹タリトホメサセ給ケリ。ウルハシキ箏ノ手ニケハナクコマカニ面白シ。サリナガラ正流ヲソムケリ。世ニスグレタル遊君白拍子等ノヒケル様コレナリ。シラヌ耳ニハ面白シ。知ル耳ニハアラヌモノ也。撥ヤウハ小爪ノモトマデ

皆力ケリ。今ハ絶タルモノ也」とあり、正流をそむいたものであつたかどうかは別として、一流の箏ひきであつたことは間違いない。なおその上に、右京大夫の父の伊行も箏に堪能であつた。そのことは、その著「夜鶴庭訓抄」が入木道とともに箏についても述べられていることによつても明らかであるが、また、「秦箏相承血脈」によれば、「志良久―周防局 宮内少輔伊行―右京大夫局 母夕霧建札門院女房 ―従三位行能」とあつて、伊行は志良久久および夕霧より箏の血脈を受けているのである。「血脈」によれば、右京大夫は父の伊行から血脈を受けていることになっているが、その上に母の夕霧からも伝授を受け、早くから名手の聞こえの高かつたことは察するに難くない。このような右京大夫が、中宮のもとへ今参りとして出仕したということになれば、人々、特に音楽に興味を持つ公達の注目の的になるのは当然のことであつて実宗の「松風の」の歌も、以上のような興味の現れと見てよいであろう。もちろん「さのみつれなき音をやつくさむ」ということばの中には儀礼的な要素が多分に含まれていることは見逃せないけれども、実宗が彼女の技倆を相当高く評価していたことも動かしがたい事実で、右のような背景を頭においてこの贈答を読むと聿々たる興味の沸き起るのを覚えるのである（本位田）。

口語訳

頭中将実宗が、いつも中宮の方へ参上して、琵琶を弾き、歌をうたつて遊んで、時々私に、「琴を弾きなさい」などといわれたのを、私は、「私などが弾いてかえつて興さめでございます」とばかり申して過ぎていたが、ある時、手紙のような体裁の便りをよこして、その中にはただこのような歌だけが書いてあつた。

四 松風の響きにもたとえられるあなたの箏の合奏もなく、独り

寂しく弾くわたしの琵琶は、そのようにばかりわたしの好意に対して素知らぬふりをなさっているあなたの態度を恨んで、泣く音を尽くすことでしようか。

それに対するご返事

五 世間並みの、松風にもたとえられるほどの箏だったならば、いくら聞いても聞き飽きないあなたの琵琶の調べに、どれほど合奏させていただくことでしよう。とてもつたなくしてお恥ずかしいから、合奏をお断りしているのです（村井順 評解・久保田淳 建札門院右京大夫集による）。

本文

をなし人の四月みあれの比ふちつほにまいりて物かたりせしをり権亮これもりのとをりしをよひと〇めてこのほとにいつくにてまれ心とけてあそはむとおもふをかならず申さんなどいひ契て少将はとくたゝれにしかすこしたちのきてみやらるゝほとにたゝれたりしふたみのいろこきなをしさしぬきはかへてのきぬそのころのひとへつねのことなれといろことにみえてけいこのすかたまことに急物かたりいひたてたるやうにうつくしく見えしを中将あれかやうなるみさまと身をおもはゝいかに命をしめて中くゝよしなからむなといひて

六 うらやましみと見る人のいかはかりなへてあふひをこゝろかくらん

たゝいまの御心のうちもさそあらんかしといはるれば物のはしにかきてさしいつ

七 中くゝに花のすかたはよそにみてあふひとまではかけしとそおもふ

諸注

をなし人―頭中将実宗。藤原（西園寺）実行（本位田）（石川）。みあれ―四月中の酉の日、酉の日が二回の場合は、下の酉の日に山城国加茂神社で行なわれる例祭（加茂祭）のこと。単に「まつり」ともいう。この日祭使以下職員みな葵を衣冠につけ、また社前その他車、棧敷の御簾に至るまで葵をかけるので「あふひ祭」とも称している。「みあれ」は「御生れ」の意。「御生（みあれ）」は「御形」とも書く。加茂神社の祭神別雷命（わけいかずちのみこと）の生まれた日という。（本位田）（久松）（村井）（糸賀）（久保田）。ふちつほ―内裏五舎の一、飛香舎のこと。清涼殿の西北にあり、庭前に藤を植えてあるので藤壺と称した。皇后の御座所と定められている処で、当時中宮徳子が居られたわけである（本位田）（久松）（村井）（久保田）。これもり―平重盛の長子。当時右少将中宮権亮であった（本位田）。保元三年（一一五八）出生、承安二年（一一七二）中宮権亮となり、右近衛権少将を兼ねる。すなわち、彼が「権亮少将」と呼ばれたのはこの時からである。その後、治承二年（一一七八）中宮権亮をやめて、東宮権亮を兼ね、治承四年（一一八〇）東宮権亮を辞す。すなわち、彼は九年間そう呼ばれていたのだ（村井）。寿永三年（一一八四）没。嘉応二年（一一七〇）右近衛少将、後に中宮権亮を兼ね、承安三年（一一七三）従四位下。治承四年（一一八〇）東国に挙兵した源頼朝の軍を討つ大將軍となり、富士川の合戦で敗走。同年十一月右近衛中将。寿永二年源義仲追討の大將軍となり砺波山に戦い敗れた。寿永三年軍陣を脱出して高野山に参り、出家。次いで熊野三山巡拝の後、那智の沖で入水。北の方は藤原成親の女。よひと〇めて―主語は実宗。管弦の遊びに周囲の人を誘う場面（石川）。このほかに―近いうちに。近近。（本位田）（久松）（村井）（石川）。いつくにてあれ―どこでもよいから、どこかで。

どこでもよいですが。どこでなりと「まれ」は「もあれ」の略（本位田）（村井）（糸賀）（石川）。心とけて―気を許して。気楽に。ゆつくりと（本位田）（石川）。あそはむ―あそびたい。管弦の遊びであるう（石川）。かならず申さん―きつとご案内申しましよう。かならずお誘い申しあげます（本位田）（村井）。いひ契りて―約束して（本位田）（村井）。少将―維盛。資盛とみる説もあるが誤りだ（本位田）（久松）（村井）。すこしたちのきてみやるゝほとにたゝれたりし―少し離れて眺められる程度の距離にお立ちになっていた。あまり近くでなく、調和のとれた姿全体を見るのに適当な距離に立っていたというのである。「るゝ」は可能の助動詞・連体形。（本位田）（久松）（村井）（石川）。ふたみ―「ふたへ」は「ふたあゐ（二藍―群書類従本）」に同じ。藍で染めた後、紅花で染めた色（石川）。一度染めた布の上に、さらに他の色で模様などを染め出したもの（久松）。「二藍（ふたあゐ）」。底本の「ふたえ」から、二重織物とか二重物とする解釈もあるが、ここは季節の上から類従本の「ふたあゐ」に改めた。「二藍」は夏に着用し、若向き（糸賀）。呉藍（赤藍）と韓藍（青藍）の糸を縦横にして織った色。夏季多く用いるが、祭の時から着るのが習慣であった（本位田）。二重（二倍）織物とも二重物ともとれるが、季節の上から異文「ふたあゐ」がよい。二藍は紅花（呉藍＝紅）と藍（韓藍）とで染めた、やや青みがかった紫色（久保田）。「ふたへ織り物」の意。綾の地紋の上に、さらに浮き出し模様を織ったもの。類従本は、「ふたあゐ」とある。その方がよいと思う。「ふたあゐ」は、紅花と藍とで染めた色（村井）。なをし―貴人常用の略服。天皇はじめ公卿らの常用する服（本位田）（久松）（糸賀）。さしぬき―衣冠・直衣・狩衣等の下に着る袴の糸種。裾にさし貫いてつけた紐があり、くるぶしの上で糸を括って

はく(本位田)(久松)(村井)(糸賀)(久保田)。かへてのきぬ―表薄萌黄、裏薄紅梅。夏用いる。「飴抄」上に「自四月一日至五月十余日用単衣」、壮年之人若鷄冠木薄色、宿老は白衣ニ帷ヲカサヌ。」とある。すなわち四月一日以後は直衣の下に着る衣を袷から単衣にかえ、その単衣の色を、若い公達は若楓、宿老の人は白衣に帷を重ねるというのである。維盛は、この時だいたい十八歳前後であつたと思われるから、祭の頃の服装として寸分の隙もない伊達姿であつたのである。若楓は襲の色目。夏四月に男女とも着用。楓は襲の色目。表裏ともに萌葱(本位田)(久松)(村井)(糸賀)。そのころのひとへ―「ひとへ」は桂の下に常に着る裏の無い衣。「そのころ」とはむかしはあわせも着たが、承安ごろはひとえを着用したの意(江馬務氏説)(村井)。つねのことなれと―当たり前の衣装ではあるが(石川)。けいこのすかた―「けいこ」を稽古と解し、故実になつた姿、または寸分の隙もない姿という意とする説も行なわれているけれども、「四月みあれの頃」とあるから、やはり警固の意とすべきであろう。賀茂祭の前々日、すなわち、未(ひつじ)の日、警固の召仰ということがあつて、六衛府の官人が威厳の任につき、祭の翌日に至つて警固の陣を解くことになつてゐた。これを解陣といつてゐる。六衛府の官人が加茂祭の警護に当る時の姿。弓箭・剣を帯し、壺胡縁(つばなぐい)を負う(本位田)(久松)(久保田)。ゑ物かたり―当時婦女子の読物であつた物語には、一般に絵が挿入されていた。絵入りの物語(本位田)(石川)。いひたてたる―書きたてである(本位田)(久松)。中将―実宗。あれ―あの人。維盛。あれかやうなるみさま―維盛のような美貌。以下の実宗の言葉は和歌にそぐわない内容。『源氏物語』紅葉賀の巻において、青海波を踊る光源氏の姿を見て弘徽殿女御が「神など空にめでつべき、かたちかな。

うたて、ゆゆし」といつた言葉を想起する(石川)。平維盛は平家一門の中でも飛び抜けて美男子だったらしく、『平家物語』・「富士川の事」の条にも、「大將軍権亮少將維盛生年二十三、容儀帯佩絵にかくとも筆にもおよび難し」とあり、また、「熊野参詣」の条には、「後白河法皇五十の賀の折、彼が青海波を舞つたことを叙べ、「この三位中将殿、桜の花をかざして青海波を舞うていでられたりしかば、露に媚びたる花の御姿、風に翻る舞の袖、地を照し、天も輝くばかりなり」とたたえてゐる(村井)。いかに命もをしくて―どんなにか命も惜しくて。身に執着の心が生じることとは罪惡であると、仏法では考えられていたのである(本位田)。中くよしなからむ―かえつてよくないことであろう。『方丈記』にも「仏の教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり」とあるが、執心執着は、仏法では罪障と考えられていた(本位田)(久松)(糸賀)。「よしなからむ」は詮ないことであろう。不都合なことであろう(本位田)。みと見る人―見る人はすべて。見る女性のみな。「と」は同じ動詞の間に用いて強調する用法(本位田)(久松)(石川)。なべて―すべて。副詞(村井)。あふひ―「みあれ」の日だから「葵」と「逢ふ日」とを懸けてゐる。加茂祭の日に、葵を社前・牛車・柱・簾などにつけ、衣冠にも挿すので「かくらん」の「かく」は葵の縁語。「逢ふ」はこの場合、恋人として逢う、の意。「こゝろかくらん」は心に願うだろう、の意(本位田)(久松)(村井)(糸賀)(久保田)(石川)。たゝいまの御心―(実宗が作者に向かつて)今のあなたのお心の中も(久松)。さしいづ―御簾とか几帳のかげからさし出したのである(本位田)(久松)。さそあらんかし―さだめしそうでしよう。「かし」は念を押す終助詞(村井)。「さ」は「あふひを心かく」を指す(石川)。中く―になまなかに。形容動

詞・連用形。すなわち、なまじ維盛などを思っても顧みられぬ自分だからの意（村井）。かえって（久保田）（石川）。花のすかた―維盛の美しい容姿の比喻（久保田）。維盛の美貌を花に譬えた。「肥後集」に「このもとに星を連ねてみゆるかな花の姿の雲の上人」とある（石川）。よそにみて―よそながら見て（石川）。あふひとまでは―「あふひ」は贈歌と同じく「葵」と「逢うふ日」の掛詞（久保田）。かけじ―望みをかけまいの意。「葵」の縁語（村井）。おぼしめしはなつしも―お思い捨てになる。思っていないようなことをおっしゃる。「思ひ放つ」の尊敬表現。「しも」は、かえって、むしろ反対にの意（本位田）。お思い捨てになつていられるようにいわれることこそ（久松）。思いあきらめておいでであるのが「しも」は強意の副助詞（村井）。心きよくやはある―心が潔白ですか。心にやましいところがありませんか。正直な言葉ではないでしょう（ありますまい）。「や」は反語の係助詞（本位田）（久松）（村井）。さること―そのとおり（石川）。歌番号四から七までの実宗は、やや道化的な役回りである。右京大夫に好意を示しつつも、軽んじられる人物として描かれている（石川）。

口語訳

同じ実宗が四月、加茂祭のころ、藤壺へ来て話をしていた時、権亮維盛が通つて行つたのを、呼びとめて、「近いうちに、どこへでもよいですが、ゆつくりうち解けて遊びに行こうと思つていますから、あなたもきつとお誘いしましょう」などと約束して、維盛はすぐそこを去られたが、少し立ち離れて、こちらから見通せる所に立っていらつしやう。維盛はふたえ織りの紫色の濃い直衣と指貫、若楓の衣服、そのころ単衣を着ることは普通であつたけれども、紅の色が格別美しく見え、警護の姿はまことに絵物語にいいたてである

人のように美しかった。それを見て、実宗が、「あの人のような風姿の持ち主だと、我が身を思つたなら、どんなに命も惜しくて、かえって身のためによくなろう」などといつて、

六「うらやましいことである。見るかぎりの人がすべて、どんなに葵祭の葵ではないが、維盛に逢う日を心に願っていることだらう

現在のあなたのお心の中も、さだめしそうお思いでしょう」と言われるので、私は物の端に書いてさし出す。

七 なまじつか維盛さまのような美しい人を思つても、顧みられない私ですから、よそながらながめて、逢うことまでは願うまいと思つています（村井順 評解による）。

このように答えたところ、実宗が、「そういつて思いあきらめていらつしやるのが、実は深く思つておいでのため、心の中は潔白ではありますまい」と笑われたのも、いかにもその通りだと思われ

本文

古建春門院の御ために御てつから御経か、せおはしまして内裏にて御講おこなはれし五巻の日女院たち後のみやく三条女御との白河とのなどみな御ほう物たてまつらせ給しそなたにゑんある殿上人もちてまいりしけしきおもしろくもあはれにもありしに中宮の御はう物は二枚を宮のすけ^{ちか}権亮^{けんりやう}などもたれたりしとおほゆこ院いらせたまひておはしましゝかたをとりはらひて道場にしつらはれたりしあはれにて

八 こゝのへにみのりの花のにはふけふやきえにし露もひかりそふらん

諸注

古建春門院―細川家本、今山本のみ「古建春門院」。宮内庁書陵部所蔵本、吉水神社所蔵本は「古建春門院」。他の諸伝本は「故建春門院」。後白河天皇の女御。安元二年（一一七六）七月八日、三十五歳で崩御。高倉天皇の母。亡き建春門院の一周忌のご追善のためにこの法華八講は安元三年（一一七七）七月五日から八日まで行なわれたことが『玉葉』の同年七月七日の条や源通親の『高倉院升遐記』に見える（本位田）（久松）（糸賀）（村井）。御てつから―高倉天皇御手づから書かせ給うたのである。御母建春門院のために、法華経をお書きになり、閑院内裏で法華八講を営み、冥福を祈られたことをいう。天皇十七歳の時である。右京大夫二十一歳ぐらい（本位田）（久松）（村井）。御八講―法華八講。法華経の法会であつて法華経八巻を四日に分け、毎日朝夕二座設けて講了するものである。その起源については「元亨釈書」巻二勤操の条に見えている（本位田）（久松）（村井）（糸賀）（久保田）（石川）。五巻の日―法華八講の第三日を五巻の日と称し、通常特別の供養が行なわれる。この時は安元三年七月七日であつた。第五巻のうち、悪人成仏と女人成仏を説く提婆達多品が重視され、朝座に行道（参会者が捧げ物を持つて講堂を練り歩くこと）を行なつた（本位田）（久松）（村井）（糸賀）（久保田）（石川）。女院たち―「玉葉」によれば、この時参列の女院は、近衛天皇の准母皇嘉門院、後白河天皇の准母上西門院、二条天皇の准母八条院であつた（本位田）（久松）（村井）。後のみやく―近衛天皇の皇后、太皇太后多子。後白河天皇の皇后、皇太皇宮忻子。高倉天皇の中宮平徳子（後の建礼門院）。これらの方々を指す。（本位田）（久松）（村井）。三条女御殿―国歌大系本、富山房文庫本等従来の諸注は後白河天皇の後三条局としている。三条局は「本朝後胤紹運録」の後白河天皇の皇子道法親王の項の割注に

「二品。号^二後高野御室^一。又号^二西院^一。母三条局。法印^二応仁女^一。」とあり、その応仁は「尊卑分脈」の花園左大臣有仁の弟、少僧都仁操の注に「出雲阿闍梨弟子改^二応仁^一 但本名^二敷^一と見えている。ところで、「玉葉」には、この日の院宮の捧物ならびにその持人が記載されているが、それによると、中宮の次には「前女御藤原朝臣」「從三位平朝臣」の二方が並んでいる。そこで、前稿では「三条女御殿」を「前女御藤原朝臣」に相当すると考え、三条局ならば源姓である可能性が多いから「三条女御殿」とは三条内大臣公教の女、大原女御琮子ではないかと推定しておいたのである。ところが、その後、「玉葉」を再調査したところ、承安四年（一一七四）十二月一日の条に女御琮子はすでに出家しており、そのため「前」を加えて「前女御」とする旨記載せられている。（中略）従つて、前掲「前女御藤原朝臣」は琮子と断じてよいことになる。一方、「從三位平朝臣」は高倉院の准母で准三后であつた從三位盛子であろうと考えられる―同日記事の捧物目録には「准后平朝臣」とある―から、やはり「三条女御殿」にあたるものは琮子以外にはないと言えるであろう。ちなみに從三位盛子は次に掲げる白川殿である（本位田）（久松）（村井）（糸賀）（久保田）（石川）。白河との―清盛の女盛子、六条摂政基実の室。高倉天皇の御母代で准三后であつた。『平家物語』・「我が身の栄華の事」に、「一人は六条の摂政殿の北の政所にならせ給ふ。これは高倉院御在位の御時、御母代とて准三后の宣旨を蒙らせ給ひて、白河殿とて、重き人にてぞましましける」とある。中宮徳子の妹。法華八講のときは二十二歳（本位田）（村井）（糸賀）（久保田）。ほう物―御捧物。仏前に捧げるものである。金銀の打枝に色々な品物をつけて捧げる。袈裟・香炉・華蔓など仏事にちなんだ品を作り枝に付けて捧げる（本位田）（久松）（村井）。

ゑんある殿上人もちてまいり―『玉葉』によれば、後白河院の捧物藤原光能、皇嘉門院は藤原泰通、上西門院は藤原頼実、八条院は源通親、太皇太后宮多子は藤原成家、皇太后宮忻子は藤原公守、三条女御は源雅賢、白河殿は藤原光長が捧げた（久保田）（糸賀）。二枝―二本の枝。『玉葉』によれば、中宮の捧物は三品で、重衡、時実、維盛の三人が捧げたのであるので三枝のはずである（久保田）（糸賀）。金銀の打枝に品物をつけて捧げる（久松）。宮のすけ^{ひけ}―「しけひら」は後人の注であろう。中宮亮平重衡。清盛の子。「中宮の亮」は中宮職の次官。従五位下相当。知盛の弟。母は中宮徳子と同じ従二位時子。一の谷の戦いで生け捕りにされ、大仏焼亡の罪を問われ元暦二年（一一八五）奈良で斬られた（本位田）（久松）（村井）（久保田）（糸賀）。権亮^{もね}―「これもり」とあるのは後人の注であろう。維盛を指す（村井）。こ女院―建春門院（村井）。とりはらひて―かたづけ（石川）。道場―八講法会（本位田）（村井）（久保田）（石川）。こゝのへ―禁中（本位田）。みのりの花―御法。八講の行なわれることを指す。「御法の花」といったのは法会の散華に用いられる造花の蓮華を思い描いたのであろう。「稔りの花」とかけている（本位田）（村井）。蓮華が美しく花開くように仏の教えが講ぜられる。「御法の花」に法華經を暗示させる。御法の花で法華經のこと（久保田）。きえにし露―故女院（建春門院）のこと。「露」は「花」の縁語（本位田）（久松）（村井）（久保田）（石川）。

口語訳

亡くなられた建春門院の御菩提のために、御門が御自ら法華經をお写しなされて、閑院の内裏でその御八講が行なわれた。その五巻の日には、女院方、後の宮方、三条女御方、白川殿など、皆御捧物を捧げられたが、それぞれその方面に由縁のある殿上人が、それら

を持つて供養の場に参った様子は、趣もあり、また感動的なものであった。中宮様の御捧物は、二本の枝に付けた品物を、中宮亮重衡、中宮権亮維盛などが、お持ちになったと記憶している。亡くなられた女院が、おいでになつて御座とされたお部屋^{おふ}の建具などを取り払つて、供養の場に設営されたのも、感慨深くて、

八蓮華が美しく花開くように、宮中で法華八講が盛大に行なわれる今日は、露とお消えなられた女院の生前のご威徳もいっそう光を増すこととごさいますよう（久保田淳 建礼門院右京大夫集による）。

本文

近衛殿二位中将と申しこる隆房しけひらこれもりすけもりなどの殿上人なりしひきくせさせ給て白河」との、女は^房うたちさそひて所々の花御らんしけるとて又の比花^ひの枝のなへてならぬを花みける人くの中よりとて中宮の御かたへまいらせられたりしかは

九 さそはれぬうさもわすれてひと枝の花にそめつるくものうへ人

返事

隆房少将

一〇 雲のうへに色そへよとて一枝をおりつる花のかひもあるかな
すけもりの少将
一一 もろともにたつねてをみよ一枝の花にこゝろのけにもうつらは

諸注

近衛殿―藤原基実の子、基通。『平家物語』や『増鏡』には、普賢寺殿と呼んでいる。承安二年（一一七二）十月二十六日右中将。安元二年（一一七六）三月六日従二位。時に十七歳であった。この時から「二位の中將」と呼ばれた。治承三年（一一七九）十一月十七

日、二十歳で関白内大臣になり、翌年安徳天皇即位とともに摂政となる。平家都落ち（一一八三）に同行するも引き返した経緯が『平家物語』に見える。その後も関白・摂政の地位についた。普賢寺関白と号した。彼は妻と継母が清盛の娘であったので、昇進も早く権勢もあつた。『平家物語』・「大臣流罪の事」の条に「故中殿の御子、二位中将基通は、入道の婿にておはしければ大臣・関白になること、これはじめ。普賢殿の御ことなり」とある（本位田）（久松）（村井）（久保田）。二位中将藤原基通は、六条太政大臣藤原基実の長子であるが、父の基実は仁安元年七月、わずか二十四歳の若さで薨じた。基通の母は従三位忠隆の女であつたが、清盛の女盛子が基実の正室であつた関係上、基実の薨後、彼女が摂関家領の大半を伝領し、清盛の権勢を背景に、基通の後見者となつたのである。基通が平家所縁の公達をつれ、白河殿盛子の女房たちを誘つて花見に行つた事実の背景には以上のような関係があるのである。この花見は治承二年か三年の春のことと考えられるが、かりに二年とすると基通十九年、隆房三十一歳、重衡二十二歳、資盛と維盛は正確な年齢はわからないが、それぞれ二十二か二十一ぐらいだっただろう。なお、白河殿盛子は「玉葉」の治承三年六月十八日の条によれば、前夜薨去、二十四とあるから、この時は二十三歳であつた。ここで、隆房について一言述べておくと、父は入道権大納言藤原隆季であつた。清盛の女婿であるから、中宮や白河殿とは義理の姉妹ということになる。『平家物語』に見える、中宮の女房小督の局に恋慕した話は有名であるが、「隆房卿艶詞」——これの絵巻も伝わっている——という名で伝わっている消息体の家集は、あるいはこの小督に対する慕情を綴つたものかもしれない。さらに後白河院の五十の賀の次第を記した「安元御賀記」もその筆であるし、現在断簡として伝わって

いる「平家公達草紙」も隆房の著であろうと推定されている。歌人として有名で「千載集」以下の勅撰集に三十四首入集している。管弦の道にも明るく「神楽血脈」「風笙師伝相承」「催馬楽相承」「大笛血脈」などにその名が見えているが、中でも笙が得意であつたらしく、「御遊抄」などをみると、公式の御遊ではたいい笙を吹いている。要するに、芸術的なセンスにすぐれた当代一流の貴公子であつたと考えられるのである（本位田）。二位中将——安元二年（一一七六）三月六日から治承三年（一一七九）十一月一六日まで従二位右近衛中将（石川）。隆房——藤原隆季の子。清盛の女婿。妻は平清盛の四女。母は藤原忠隆の女（基通の生母の姉妹）。基通の従弟。永万二年（一一六六）六月から治承三年十一月まで右中将。権大納言に至る。建永元年（一二〇六）出家、法名寂恵。家集『艶詞』（隆房集。隆房の恋づくしとも呼ぶ）。千載初出。（本位田）（久松）（糸賀）（久保田）。資盛——重盛の次男。平資盛。高倉天皇と同年。応保元年（一一六一）生、元暦二年（一一八五）没、二十五歳。母は藤原親盛の女とも藤原親方の女ともいう。仁安元年（一一六六）従五位下に叙せられ越前守となる。承安四年（一一七四）侍従、安元元年（一一七五）正五位下、治承二年（一一七八）右近衛権少将、養和元年（一一八一）十月十二日、それを辞している。したがって、右京大夫が資盛と恋愛に入つたころは、まだ少将ではなかつたと思われる。寿永二年（一一八三）藏人頭、従三位。嘉応二年（一一七〇）鷹狩りの帰り関白松殿（藤原基房）の行列と衝突し、後日平家側の武士が報復の襲撃をしたいわゆる「殿下乗合」事件を起こした。中納言藤原基家の女を妻にしたと、『愚管抄』に記事があり、容貌が異母兄維盛によく似ていたという。本書の作者右京大夫と恋愛によって結ばれた人。和歌に巧みだった。藤原師長（妙音

院)に師事し琵琶、琴、朗詠等を学んだ。和歌も『新勅撰集』に一首、『玉葉集』に一首入集しており、「資盛家歌合」を行なう。寿永三年(一一八四)一の谷の合戦で源義経の軍に三草山で敗れる。壇の浦の合戦で弟有盛、従兄弟の行盛と手を組んで入水したと、『平家物語』巻十一「能登殿最期」に記されている(本位田)(久松)(糸賀)(村井)。殿上人―四位、五位及び六位の藏人で、昇殿を許されたものの総称(本位田)(久松)。ひきくせさせ給て―お引き連れになつて。「ひきくせ」はサ変・未然形。「させ」は尊敬の助動詞・連用形(村井)(石川)。白河との―清盛の女。近衛基実の妻。すなわち基通の母(村井)。又の比―翌日。(本位田)(久松)(村井)(石川)。なへてならぬ―普通でない。すなわち、たいそう美しい。並々でなく美しいもの(村井)(石川)。さそはれぬうさ―花見にさそわれなかったつらさ。中宮の仰せによつて中宮付の女房を代表して右京大夫が詠んだ歌(石川)(糸賀)。花にそめつる―久保田淳氏は、「めづる」ならば「花を」とあるべきであり、また一本に「花に染めつる」とあることを理由として、「花に染む心」の意と見ている。傾聴すべき意見であると思うが、それなら「心」という語が必要だと思うし、また「つる」という助動詞はすでに終わった意を表すので、この歌の場合なら「染めたる」とありたいと思われる。ここは宮中に届けられた一枝の花によつて花を愛づるという意味かと思うので、やはり「花にぞ愛づる」と見ておくことにする(本位田)。底本「花にそめつる」を、全釈・大系・全書・国歌大系・文庫は「花にぞめづる」と読む。「花にそみつる」「花に染つる」という、異本に見える本文により、花にひかれる、の意の「花にそみつる」と改めた(糸賀)。花のことではいっぱいになった心の意。「花にぞ愛づる」と解する説もあるが、「はなにそみつる」「花に染つる」

などの異文の存在や、隆房の返歌の「色添へよとて」の句、資盛の返歌の「うつらば」の句などから、こう読んでおく(久保田)。桜の花に感動している。「めづる」は、「に」を受けて自動詞的に用いられている。「花に染つる」「花にそみつる」の本文もある(石川)。くものうへ人―殿上人。ただし、ここでは中宮の御方に侍する人々をさす(本位田)(村井)(久保田)(石川)。隆房少将―隆房が右中将であつたのは、永万二年(一一六六)六月から治承三年(一一七九)十一月まで(本位田)(石川)。雲のうへ―中宮の御所(石川)。色そへよ―美しさを添えて下さい。「花」の縁語(石川)(久保田)。かひもあるかな―甲斐があつたというものです(石川)。もろとも―「さそはれぬ」の歌に対する返歌は隆房がしている。だから。資盛は返歌をする必要はない。それなのに返歌をしている。その上「もろともに」の資盛の歌は、贈歌の作者が右京大夫であることを知つて出した個人的なものであり、恋慕の心を寄せている。彼等の恋愛はこのころ芽生えたものである(村井)。平家一門の公達と、平家にゆかりある人々が諸所の花を尋ねた翌日、中宮に美しい桜の一枝を贈ってくる。右京大夫が詠んだ歌に対して二首も返歌が来る必要はないので、資盛の歌は右京大夫に対する個人的な恋慕の情からという説がある(村井)。しかし、ここは「中宮の御方へ」贈られた桜の一枝をめぐる、中宮付きの女房対殿上人の公的な贈答の挨拶であろう(糸賀)。たつねてをみよ―正元本「たづねてをみよ」。たづねてごらんない。文末が命令・希求・願望などの場合、上には間投助詞「を」があることが多いから、ここは「を」が原形かもしれない(本位田)(石川)。資盛は治承二年(一一七八)一二月二四日より右近権少将となつたので、官職表記が当時のものであるとすれば、この贈答歌は治承三年春以降に詠まれたことになる。し

かし、右京大夫は治承二年（一一七八）秋以前に宮仕えを退いているので、この贈答歌は少なくとも治承二年以前のものではないのであろう。配列からすると私的なやりとりというよりは、宮中の様々な人との交流の一齣と見るべきであらう（石川）。

口語訳

近衛基通を、「二位の中將」と申し上げていた頃、その基通が、隆房・重衡・維盛・資盛などの、殿上人だった方をおひきつれになり、母の白河殿に仕えている女房たちを誘って、諸所の桜を御覧になったといつて、その翌日、花の枝のたいそう美しいのを、「花見に行った人々の中から」といつて、中宮様の御所へ献上されたので、私が詠んで送った歌。

九 花見にお誘いくださらなかったつらさも忘れて中宮様に仕えている女房たちは、いただいた一枝の桜を、たいそう御賞美なさいました。

返事

隆房の少將
一〇 中宮様のお美しさに、さらに花を添えたいと手折った枝をさしあげた甲斐がありましたよ。

資盛の少將
一一 お贈りした桜のひと枝がそんなにもお気に召したのならこの次はご一緒に花の名所を尋ねてみませんか（村井順 評解による）。

本文

いつのとしにか月あかゝりし夜うへの御ふえふかせおはしまし、かことにおもしろきこえしをめてまひらすればかたくなはしきほとなるとこの御方にわたらせおはしましてのちにかたりまいらせさ

せ給たりけるをそれはそらことを申そとおほせ事あるとありしかは一二 さもこそはかすならすとも一すちに心をさへもなきになすかな

とつふくやくを大納言君と申しは三条内大臣の御女ときこえしその人かく申と申させ給へはわらはせおはしまして御あふきのはしにかきつけさせ給ひたりし
一三 ふえたけのうきねをこそはおもひしれ人のこゝろをなきにやはなす

諸注

いつのとしにか―いつの年であつたかはつきり記憶せぬが。安元初年のことか（久松）。つきあかゝりし―月の明るきは「あかし」といつて「あかるし」とは言わない。あかるかつた夜（本位田）（久松）。うへ―八〇代高倉天皇。後白河院の皇子。御笛に御堪能であらせられた。高倉天皇の御笛の師匠は三条大臣公教の次男権大納言実国であつた。「懷竹抄」に「高倉院 御師匠大納言実国。依御師匠賞叙正二位。置萬秋樂御譜於夜御殿。常被御覧云々。」と見える。叙位は『玉葉』によれば、承安五年一月四日の朝觀行幸の機に行なわれた（本位田）。御ふえ―横笛。竜笛とも。吹き口のほか、七穴。高倉天皇が藤原実国（三条内大臣の男、滋野井と号す）を笛の師としたことが『尊卑分脈』や笛の伝書『懷竹抄』などに見える。順徳院の『禁秘抄』上・諸芸能事にも「笛。堀川。鳥羽。高倉。法王。代々不絶事也」という（久保田）。ふかせおはしまし、が―天皇の御動作に対しては「せおはします」を用い、中宮には「せ給ふ」を用いている点に注意（本位田）。めてまひらすれば―おほめ申し上げると。かたくなはしきほとなる―右京大夫の賞めかたといったら、まった片意地なくらいです。これは中宮より主上に申

し上げられたおことば（本位田）（久松）（村井）（石川）。つたない腕前。じつさいは高倉天皇は笛の達人だった。天皇の笛をたたえることは、当時の諸書に見えている。隆房は、『安元御賀記』で、天皇の笛をたたえ、「さても御笛の音こそ、今もたぐひなく、いにしへもかくやありけむと聞こえしか。夢か夢にあらざるか。神なり。又神也」と書いている（村井）。この御方にわたらせおはしましてのちにかたりまいらせさせ給たりけるを―中宮の御座所。主上が中宮の御座所にお出でになって後に中宮が主上に奏上なさったので。「まいらせ」は主上に対する敬語、「させ給ひける」は中宮の御動作に対する敬語（本位田）（久松）。そらこと―嘘。ここでは「いいかげんのこと」ぐらいの意（本位田）。右京大夫は嘘（お世辞）を申しているのだ（村井）（石川）。さもこそは―右京大夫のお賞め申し上げたことばを主上は「嘘を申すのだ。」と御否定になった。これはすなわち自分というものを人並みに認めていただけないからであるとお怨み申している気持ちである。すなわち「さもこそは」というのは「空ごとを申すぞ」を受けているわけであって、自分の申しあげることなど頭から否定しておしまいになるほど物の数ではない人間でございましょうけれど、というぐらいの意味である（本位田）。それは確かに（石川）。かすならすとも―人の数に入らぬいやしいものですが。人数にも入らない私であっても（村井）（石川）。一すちに―いちずに。ひたすら。「なきになす」にかかると見るべきである。（本位田）（石川）。心―風雅の心。作者の義理の祖父は笛の達人だったから、作者も心得があったにちがいない。高倉天皇の笛の音を心から賛美した私の真心（村井）（石川）。なきになす―無視する。語としては平安中期より存在するが右京大夫の好んだ語であった。実際にはあるものを無いものにしてしまう、すなわち、無視し

てしまう。無になさるのですね（本位田）（久保田）（石川）。大納言君―中納言実経の女、公教の孫、七条院大納言。初め高倉院に仕え、後七条院に仕えた（本位田）（久松）。三条内大臣―藤原公教。保元二年八月内大臣。平治二年七月薨、五十八歳。（本位田）。かく申―右京大夫がこのように申しております。「さもこそは」の歌を高倉天皇に伝えたのである（石川）。わらはせおはしまして―主語は高倉天皇（石川）。ふえたけのうきね―下手な笛の音。「ね」は竹の縁語で「根」と「音」を懸けている。笛を笛竹と呼ぶことが和歌では多い。「うきね」は「憂き音」（下手な音色）に竹の縁語「根」を懸ける（本位田）（久松）（村井）（久保田）（石川）。人のこゝろ―そなたの心（石川）。なきにやはなす―無にしようか、いやするはずがない（石川）。

右京大夫の母方の祖父大神基政は、不世出の笛の名人であった。音楽の才能にも恵まれた作者に、御笛の調べの分らないはずはなく、真実感動してお褒めしたのに、「お世辞を言ったのだ」と聞き捨てならぬ仰せであったので、自分のまごころをも疑われた形になった作者は、抗議の歌を口ずさむ。もともと天皇と中宮の会話は、右京大夫の才能を認めた上でのたわむれであったのに、作者だけがむきになっていた（糸賀）。

笛の名人大神基政の孫娘である作者にふさわしい、笛に関する思ひ出話。父基政撰といわれる笛の伝書『竜鳴抄』にも「月の明からん夜、夜もすがら遊びては…」と月夜の笛の音の情趣を述べている。作者のように笛の巧拙を聞き分ける耳を持ち合わせない中宮は、帝の笛の技量が解せず、軽い嫉妬から作者を揶揄する。心外に感じて思わず作者が口ずさんだ抗議の歌に、帝から細やかな返歌が届く（久保田）。

「ふえたけ」の歌は、右京大夫が中宮付の女房であることを忘れていたため、誤訳しているものが多い。「上の女房」と「宮の女房」とは、はっきり区別されていて、「宮の女房」が気安く天皇と和歌のやりとりなどできない。「めで参らすれば」は、天皇の笛の音が聞こえてきたので、中宮に向かってほめたのである（村井）。

「ふえたけ」の歌は、高倉天皇と中宮徳子を月日の光と賛仰する「雲のうへに」に比べて具体的、日常的な逸話である。高倉天皇の「それはそら事を申ぞ」「笛竹のうきね」の言葉は、音楽に造詣の深い右京大夫に対する謙辞である。右京大夫は自尊心をくすぐられると共に、天皇の濃やかな心づかいに感激しただろう（石川）。

口語訳

いつの年であつたか、月の明るかった夜、天皇が御笛を吹いていらつしやつたが、たいそう趣深く聞こえて来たので、私がお褒め申し上げると中宮は、「聞いていられないほどのほめようです」と中宮様の御所で笑つていらつしやつて、後に天皇にそのことをお話し申し上げなると、天皇は、「右京の大夫は嘘を申しているのだ」とおつしやられたと、いうことだったので、

一二 いかに私などはつまらぬ者でしょうが、いちずにお笛の上手下手の趣さえわからぬ者のようにおつしやいますのは残念でございます。

とつぶやいているのを―大納言の君という人は、三条内大臣の御娘ということだが―その大納言の君が中宮様に、私がこのようにつぶやいていましたと申し上げられると、中宮様はお笑いになつていて、後に、御扇の端に書きつけあそばされて、私にたまわつた（本位田）（久松）（村井）（糸賀）（石川）。

一三 天皇は自分のお笛のつたないことを、よく知つていて仰せら

れたことで、あなたの風流心を見えなされたものではありません（村井）。

そなたの真心を見えなどするものか。ただ、わたしには自分の笛の下手なことがよくわかつているのだ（久保田淳 建礼門院右京大夫集による）。

おおむね、院政期以降の家集は、出された題によつて読む題詠歌が主流を占めていた。こうした時代に『建礼門院右京大夫集』のような、作者の実人生の光と影を伝える家集は少ない。しかし作者は、全く時流の詠法に背をむけていたわけではない。次の十四から五十三までの四十首は、題詠歌群である（糸賀）。十四から五十三までの四十首が「何となく詠みし歌」として一括される題詠歌群。散佚歌合や歌会の作品が含まれており、それらの多くは二つ以上の事物を結合させた、いわゆる結題（むすびだい）の歌（久保田）。

本文

なにとなくよみし歌の中に春たつ日

一四 いつしかとこほりとけゆくみかは水ゆくすとをきけさのはつはな

一五 春きぬとたれうくひすつけつらむたけのふるすははるもしらしを

諸注

春たつ日―立春の日（村井）。いつしかと―早くも。待ちかねたようすで。立春になるのを待ちかねていたかのように（本位田）（石川）（村井）。こほりとけゆく―「立春解氷」という觀念に基づいている（久保田）。「春たちける日よめる 袖ひちてむすびし水の凍れるを春たつ今日の風やとくらむ」（紀貫之、『古今集』春上）、「岩間とぢし氷も今朝はとけそめて苔の下水みちもとくらむ」（『西行

上人集』春のごとく当時、氷は立春とともに解けると詠む習慣があった（糸賀）。みかは水―禁中諸殿の軒下を流れる溝の水。御溝水と書く（本位田）（久松）（久保田）。行くすゑ―宮廷に対する慶祝の心をこめていう（久保田）。御溝水が行く末遠く流れるように、君が代が行く末遠く栄えることを言祝いだもの。御溝水が行末とおく流れるのと君が代の行末遠いのを祝う心と懸けている（本位田）（石川）（糸賀）。十四以下題詠歌群の後に位置する資盛との恋の思ひ出と区別する意識のもとに配列されたか（石川）。けさのはつはな―細川家本と今山本のみ「はつはな」。群書類従所収本など他の転写本は「はつはる」。今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ（一）二三ページ。春きぬ―上に「春来ぬ」といって、また「春も知らじ」と「春」の語を繰り返すのは巧みとはいえない（久保田）。うくひす―鶯が竹林で鳴く類作は、「西楼月落花間曲中殿燈残竹裏音」（『和漢朗詠集』春）、「御苑生の竹の林に鶯はしば鳴きにしを雪は降りつつ」（『万葉集』卷十九）などがある。これらにより鶯の冬の間の棲処も竹の中にあるものと思ひなして詠んだものである（本位田）（糸賀）。たけのふるす―鶯は竹に棲むと考えられていた。「梅の花散らまく惜しみが園の竹の林に鶯鳴くも」（万葉・八二四）、「竹近く夜床寝はせじ鶯の鳴く声聞けば朝寝せられず」（後撰・春中 藤原伊衡）などと歌われ、かぐや姫も鶯の中から生まれたとする伝承も存する（久保田）。

口語訳

何ということなく詠んだ歌の中で、立春を詠んだ歌。

一四 立春の朝、早くも氷が解け、御殿のお庭の水も遠くゆるやかに流れていく。君が御代もみ溝水のように遠くお栄えになりますように。

一五 春になったといった誰が鶯に知らせてやったのか。竹藪の中の古巣は今朝春が来たのもわからないだろうに、もう鶯が鳴いているよ（糸賀きみ江 新潮日本古典集集成による）。

本文

鶯有慶音

一六 のとかなる春にあふよのうれしさはたけの中なるこゑのいろにも

諸注

慶音―泰平の御代をよろこぶ声（本位田）。「鶯、慶音あり」。慶音は喜びの音。鶯の声に喜びのひびきがあるという意。一本に、「うぐひすよろこびのこゑあり」とある（村井）。よ―「代」と「節（よ）」との懸詞。「節」は竹の縁語（糸賀）（石川）。たけの中なるこゑのいろにも―「たけの中」は、竹藪に竹園（宮中）を響かせるか（石川）。

口語訳

一六 泰平の御代ののどかな春に生れあわせたよろこびは、竹の中からきこえてくるうぐいすの声の調べにもうかがえます（久松潜―日本古典文学大系による）。

本文

対月待花

十七 はやにほへ心をわけてよもすから月をみるにも花をしそおもふ

諸注

対月待花―「月に対して花を待つ」。花は櫻花（村井）。にほへ―「匂ふ」は色美しく咲くこと（本位田）。心をわけて―心を二つに分けて。月を賞する一方花のことを思っている心である。「おなじく

は月のをり咲け山ざくら花見る夜半の絶間あらせじ」(『山家集』中雜)(本位田)(久松)(村井)(糸賀)。よもすがら―終夜。夜どおし(村井)

口語訳

一七 桜の花よ、早く美しく咲きにおっておくれ。夜通し月を見るにつけても、心を分けて月だけでなく花のことを思うよ(久保田淳 建礼門院右京大夫集による)。

本文

往事恋

一八 あはれしりてたれかたつねんつれもなき人をこひい^はわせなるとも

諸注

往事恋―「往時の恋」。昔の恋を詠んだ歌(村井)。昔の恋(久松)。あはれ―恋慕の情のあわれさ(村井)。つれもなき―気強く無情な(本位田)。なさを知らない(久松)。無情な(村井)。人をこひ^はひ―人を恋しく思うおもいにたえかねて(本位田)。恋ひ悩み(村井)。いわせなるとも―いわゆる望夫伝説によったもの。この伝説は「十訓抄」第六に見えるが、それによると、この話は早く平安時代の「しらら物語」などから世に知られていたものらしい。しかし、それが広く膾炙するに至ったのは、それよりもむしろ永万二年(一一六六)「中宮亮重家卿歌合」における俊成判、同年「経盛卿家歌合」における清輔判などによってであろう。今、俊成判より次に抄出すると、「この石となることは、若し望夫石と申す事にやあらん。そのかみおろく見侍りしかば、武昌北山上有望夫石其状如人云々。昔貞婦ありけり。その男遠き国へゆきけり。別を惜しみてかの山の上に立てりて、夫を見送りけるが化して立てる石となりけり云々。」と見える(本位田)(久松)(石川)。『古今著聞集』巻五にも見える(村井)(糸賀)。「石とだになりけるものを人待つはなどか我が身の消えぬべからん」(夫木集・能因)、「逢ふことのかたき嘆きに恋ひ死なば我もや野辺の石となりなん」(小侍従)、「恋川に沈むにつけて思ふかな我が身も石となるにやあるらむ」(藤原頼保 中宮亮重家朝臣家歌合)とある(村井)(糸賀)(久保田)。「十訓抄」第六に見える望夫石伝説引用する。「昔、夫婦相思ひて住みけり。夫、軍にしたがひて遠く行くに、その妻小さき子を具して、武昌の北の山まで送る。夫の行くを見て悲しびたてり。夫かへらずなりぬ。妻その子を負ひて、立ちながら死ぬるに、化して石となれり。その姿人の子を負ひて立てるがごとし。これによりて、この山を望夫山と名づけ、その石を望夫石といへり。くはしくは、『幽明録』に見えたり。『しらら』といふ物がたりに『しららの姫君、夫の少将の迎にこんと契りて、おそかりしを待つとて、よめる』とあるはこの心なり。たのめつつきがたき人を待つほどにわが身ぞなりはてるべき。ただし、『唐物語』に見える望夫伝説では『……あさからず契りつつありふるに、この夫思のほかにて亡くなりけり』とあるのみで、夫の従軍のことおよび子を背負った姿ということは記されていない」(本位田)。

口語訳

一八 過ぎ去った昔の恋という題で 無情で訪ねてきてくれない人を恋い慕って、その思いが石になろうとも、それに心を打たれていった誰がたずねて来てくれるでしょうか。誰もたずねてくれる人などありませんまい(本位田重美 評註建礼門院右京大夫集全釈による)。

本文

仙家卯花

- 一九 露ふかき山路のきくをともとしてうのはなさへもちよもさ
くへき

諸注

仙家―不老不死の仙人の住む家（本位田）（久松）。仙家卯花―「仙家の卯の花」という題意。卯の花は、六月ごろ山野に咲く白い花。生垣などにもする。うつぎの花（村井）（糸賀）。露ふかき山路のきくをともとして―「仙宮に菊をわけて人のいたれる形をよめる 濡れてほす山ぢの菊の露の間にいつか千歳をわれにへにけむ」（古今・秋下 素性法師）による。「うのはな」は、初夏の卯月（旧暦四月）の頃に咲き、白いので白菊を「友として」といった（久保田）。

口語訳

仙人の家の卯の花という題で

- 一九 仙人の家に行く山路の菊の露にぬれると、それを乾かすちよつとの間に千年もの月日が過ぎるというが、この仙家の卯の花の露もいちめんにおりた菊のそばにいて千年も咲くことだろうか（久松潜一 日本古典文学大系による）。

本文

かたおもひをはつるこひ

- 二〇 おきつなみいはうついそのあわ^はひかひひろひわひぬる名こそおしけれ

諸注

かたおもひをはつるこひ―片思いを恥ずかしく思う恋、という題意（糸賀）（村井）（久保田）（石川）。おきつなみいはうついその―「あわび貝」を呼び出すだけの意味であるが、修辭としては後の「拾ひ

わびぬる」と照応している。すなわち、沖から寄せてくる波が激しく岩に打ちかける磯の鮑貝であるから、なかなか拾うことができないのである。「おきつなみ」は、沖に立つ波。「つ」は連体修飾語をつくる格助詞。「タつ方」「端つ方」など用例が多い（本位田）（村井）。

あわひかひ―鮑貝は片方だけしかないもので、古くから片思いに譬えられている。「万葉集」卷十一寄物陳思 二七九八に、「伊勢の海女の朝な夕なにかづくとお鮑の貝の片もひにして」とある（本位田）（久松）（村井）。ひろひわひぬる―拾おうとしても拾うことができない。拾いかねる。「清輔朝臣集」に、「恋しさのたぐひもなみに袖ぬれて拾ひわびぬる忘れ貝かな」とある。この上ない恋しさに泣き濡れながら忘れ貝を拾おうとするのであるが、拾うことができない、忘れることができないというのである。拾い悩んでいる（本位田）（村井）（石川）。名こそおしけれ―名は噂。噂の立つのが残念だ（本位田）。浮き名の立つのがくちおしい（村井）。

口語訳

片思いを恥じる恋

- 二〇 沖に立つ波が岩を打っている荒磯にあるあわび貝を、拾いかねているように、思いをとげられないで片思いに悩んでいるという評判のたつのがくやしいことである（村井順評解による）。

本文

くもるよの月

- 二一 曇る夜をなかめあかしてこよひこそちさとにさゆる月をな
かむれ

諸注

月のよの月―つきが空にある夜の月。「月の」は類従本にはない

(村井)。底本「くもる月のよの月」、上の「月の」を消しもらしたと見る(久保田)。なかめあかして―眺めて夜を明かす。ただし、ここでは夜明けまでながめたのではなく、暁近くまで眺めたのである(本位田)。物思いにふけて夜を明かして(村井)。「ながむ」は、「月を眺める」に物思いにふける意を込める(糸賀)。昨夜は月をみられないまま夜をあかしたのである(石川)。こよひこそ―いまこそというくらいの気持ちであるがまだ夜明けになっていないのでこよひといった(本位田)(糸賀)(石川)。千里―「ちさと」とよむが、「さと」は部落ではなく、今いう千里(せんり)と同じに解してよい(本位田)。「ちさとにさゆる月」は、白楽天の、「三五夜中新月色、二千里外故人心」(『白氏文集』・巻十四・八月十五日夜禁中にて独り直し月に対して元九を憶ふ)に―よる(村井)(糸賀)(石川)。「秦旬之一千余里 凛々永鋪(和漢朗詠集上・十五夜)の詩句を念頭に置いている。「夏蔭按、此句の下句、落うせたるにや。さて次の題と上句もかけて、こと歌の下句をかく写し合せしなるべし」(前田夏蔭書入本)(久保田)。

口語訳

曇る月の夜の月

- 二一 曇った夜を、物思いにふけて夜を明かし、今夜こそは、千里四方までさえ渡る月をながめることだ(村井順 評解による)。

本文

夕にす^へる野の花

- 二二 心をおはななそてにとめ^をおきてこまにまかする野辺のゆふくれ

諸注

夕にす^へる野の花―夕暮れに野の花のそばを通りすぎる、という題意(糸賀)。夕暮れに通り過ぎる野の花(石川)。野の花―普通、秋の題と考えられている(久保田)。おはななそて―尾花は薄(秋の七草の一つ)の穂。穂薄の風に吹かれて靡く様が恋しい人を招くのに似ているので、それを人の袖に見立てて尾花が袖という。題の野の花にあたる(本位田)(久松)(村井)糸賀(久保田)。こまにまかする―『韓非子』説林上、『蒙求』などにある「老馬道を知る」の故事による。「管仲(中略)迷惑失道、管仲曰、老馬之智可用也。乃放^二老馬^一而随^レ之、遂得^レ道」と見え、わが国でも古くから老馬は道を知るものとされていた。「夕闇は道も見えねど旧里は本来し駒にまかせてぞ来る」(後撰・恋 読人不知)「蘆の屋の昆陽のわたりに日は暮れぬいづち行くらん駒にまかせて」(後拾遺・騎旅・能因)もこの故事による(本位田)(石川)。野辺のゆふくれ―秋と結びついた景(石川)。

口語訳

夕方、野の花のそばを通り過ぎる

- 二二 夕暮れの野辺に人を招くように、風になびくすきに心をひかれながら、夕暮れの野を駒の歩みにまかせて通ることだ(本位田重美 全釈・村井順 評解による)。

本文

たかひにつねにきく恋

- 二三 ありときかれわれもき、しもつらきかなた、ひとすちになきになして

諸注

たかひにつねにきく恋―お互いにいつも相手の噂・動静を聞き合っているような恋、というのは要するにお互いに気持ちはありながら

逢えない恋（恋愛）である。逢えぬ恋（本位田）（久松）（糸賀）（久保田）（石川）。ありときかれ―無事に生きているといううわさを相手に聞かれ。「れ」は受身の助動詞・連用形（村井）（糸賀）。私のことが相手の耳に入り（石川）。きゝしも―底本「ききしも」、今、吉水神社本によった。「く」と踊り字の「ゝ」とは常に誤られる字であるから、どちらかが誤写であるということはいうまでもない。意味もどちらでも通じるが、「しも」の意を生かした方が歌に力強さが出ると思うので、あえて吉水神社本に拠ったのである（本位田）。「ききしも」の「し」は過去の助動詞（糸賀）。「きゝしも」は、一本に「きくしも」とあるのがよい（村井）。底本「きゝしも」、昭本など諸本により「聞くしも」に改める（久保田）。われもきゝしも―私も相手の噂を聞いたことは（石川）。つらきかな―情けないことです。むごいことです（本位田）。なきになしなて―「なきになす」は前出（一二歌）。無視する。詞を畳みかけるように用いるのは作者の表現の特色。「なで」の「な」はいわゆる完了の助動詞の未然形、「で」は「ずて」の意で、打消の意を持つ接続助詞。無視してしまわないで。（本位田）（久松）（村井）（糸賀）。無視することもできないで（石川）。これ以前に言及されないが、資盛との恋に、こうした段階があったことは確かであろう。この題詠の歌に個人的体験が反映しているかは不明だが、「なきになす」（実際にはあるものを無いものにしてしまう、すなわち、無視してしまう）という彼女好みの表現が見られることから、ある程度自己の心情を反映しているか（久保田）。「あり」との対比は一五二（ありけりといふにつらさのまさるかな無きになしつつ過ぐしつるほど）にも見られる（石川）。

口語訳

互いにいつも相手の噂を聞くだけで逢えない恋

二三 どうせ逢えないのならいつそ全然無視してくればよいのに、いちがいに無視してしまいもしないで、こちらのようすをきいている模様があたり、またこちらでも相手のようすが聞こえてきたりするのがまったくむごいことです（本位田重美 全釈による）。

本文

谷のへんのしか

二四 たにふかみすきのこすゑをふく風に秋のをしかそこゑかはすなる

諸注

谷のへんのしか―たにのあたりで鳴く鹿、という題意。一般に、鹿が鳴くのは、雄鹿が雌鹿を恋うて鳴く哀切なものとして意識されていた。「奥山にもみぢふみわけ鳴く鹿の声きくときぞ秋はかなしき」（よみ人しらず、『古今集』秋上）（糸賀）（久保田）（石川）。「へん」は群本、「ほとり」（久松）。たにふかみ―谷が深いので。「み」は原因・理由を表す接尾語（本位田）（村井）（糸賀）（石川）。風に―「に」は場所を表す格助詞で、風の中にの意（村井）。すきのこすゑをふく風―杉の梢を吹く風の音が、牡鹿の鳴き声と錯覚されるのである（石川）。秋のをしかそこゑかはすなる―鹿と鹿とが声をかわすのではなく、風と鹿とが声をかわすと見るべきであろう。『山家集』の「清見瀉沖の岩こす白波に光をかはす秋の夜の月」などはその参考になる。「秋のをじか」と断つたのは外に秋の風物が用いられていないので鹿のなく季節を示す「秋の」という語が必要となつたのである。「なる」は推定の助動詞・連体形（本位田）（村井）。「なる」は物音を聞いてその音の源を推定するはたらきをもつ助動

詞（久保田）。「こゑかはすなる」は牡鹿が応えて鳴いているように聞こえる（石川）。

口語訳

谷のあたりでなく鹿

二五 谷は深く杉の梢を吹く秋風に妻を恋う雄鹿は哀しげな声を響かせるようだ（糸賀きみ江 古典集成・村井順 評解による）。

本文

ねさめのたう衣

二五 うつおとにねさめの袖そぬれまさるころもはなにのゆへとしらねと

諸注

ねさめのたう衣―寝覚めて聞く砧きぬたの音、という題意（糸賀）。うつおとに―「に」は「のために」の意。原因・理由を表すか格助詞。

（村井）。たう衣―糊をして半ば乾いた衣を砧（衣板）の意。布地をのせて、柔らかくしたり艶を出したりするためにたく木や石の台にのせ、槌でたたいて皺をのばし、あるいは光沢を出すこと。物憂げな音は単調で秋の夜の哀感、寂しさを誘うものであった。女性が従事するとされ、閨怨の情を連想させる秋の題。六朝以来の詩に詠まれ、遠征のたびに出ている夫を思慕しつつ妻が打つというのが本来の詠まれ方である。哀調を帯びた音が晩秋から冬にかけての夜響きわたるのである。「衣」は「袖」の縁語（本位田）（村井）（糸賀）（久保田）（石川）。ぬれまさる―『古今集』秋上、よみ人しらずの、「ひとりぬる床は草葉にあらねども秋くるよひは露けかりけり」などによって、秋は涙で袖がぬれがちであると考えるのが通例であった。そのぬれた袖の上に、砧の音を聞くといいそう涙が落ち添うと

いうのである（本位田）。寝覚めの袖はただでさえ涙に濡れがちであるのに、擣衣の音のためにまた涙が流れ、袖が濡れてしまう（石川）。砧の主は、独り寝のわびしさをまぎらして打っているのかもしれない、という想像が涙をさそう（糸賀）。ころもはなにのゆへとしらねと―あの擣うつ衣にどんなわけがあるかわからないけれど（石川）。

口語訳

寝覚めて聞く砧の音

二五 夜半、一人寝覚めて砧の音を聞いていると独り寝の涙にぬれている袖がいつそうぬれまさる。あの衣には涙を誘うどんなわけがあるのかしらないけれど（糸賀きみ江 古典集成）。

本文

名をかへてあふ恋

いとはれしうき名をさらにあらためてあひみるしもそつらさそひける

諸注

名をかへてあふ恋―変名を用いて恋人に逢う恋、という題意。男性の立場に立つて詠む題である（糸賀）（石川）。一度評判になっていたのを新しく別の噂を立てて成就した恋。久保田淳氏は、「借他名「遂恋」に近い意とする。しかしそれでは歌の「さらに」が生きないように思われる（本位田）。変名を使って恋人と逢う（親しくなる）恋愛。『林葉集』恋の「借他名「遂恋」その人と名告るに君が解けぬればその名の主ぞうしろめたなき」という作に近い恋愛。『源氏物語』浮舟で勾宮が浮舟に近づいた時の事や、『落窪物語』の面白の駒の一件などが参考になる。昔は、相手の男の名を聞いた

だけで、女が逢おうとしないケース、別の男が装って入り込んだ男と契ってしまうケースは、いくらでもあり得た。当然、男の立場で詠むべき題で、なかなか難題（久保田）（糸賀）。恋のじやまをするものがいて、本名を名告ったのでは逢えないので、名を変えて逢う恋（村井）。いとはれしうき名―あなたにきらわれたつらい、いやな名前。本名（石川）（久保田）。「うき名」は憂き名。哀しい名（村井）。さらに―「さらに」は新に。副詞（村井）。あらためて―変えて（石川）。あひみるしもそ―恋人として逢うということはいつそう。「しも」強意を表わす副助詞。「ぞ」は強意を表わす係助詞（村井）（糸賀）（石川）。

口語訳

変名を用いて恋人に逢う恋

二六 一度は「きらわれている」というなげない評判が立っていたのを、今度はさらに新しく「また縊りが戻ったそうだ」という噂をたてて逢うことになった、その点かえっていいそうつらい思いをします（本位田重美 全釈による）。

本文

野亭夕の草

二七 ゆふされは夏野、草のかたなひきす、みかてらにやすむたひひと

諸注

野亭―野中にある小亭。野中の茶店。野中の家。野のなかにあるあずまや。（本位田）（久松）（村井）。野亭夕の草―野中のあずまやの夕方の草、という題（糸賀）。野の中のあずまやから見た夕方の夏草（村井）。ゆふされは―夕方になると。「ゆふされ」は、ラ行四段・已然形（村井）。かたなひき―草が風に吹かれて一方になびく（本

位田）。片方になびくこと（村井）。一方に靡き。夕風がそよそよと吹いているのである。夕方を暗示する。「吹きおろすあらしや間なき小塩山裾野の草のかたなびきする」（頼政集）（久保田）（石川）。す、みかてらに―夕涼みをかねて（石川）。かてら―ながら。かたがた（本位田）。

口語訳

野の中のあずまやから見た夕方の夏草

二七 夕方になると風が出て、夏野の草は片方に靡いて涼しいので、旅人は涼みがてらにあずまやで休んでいることだ（村井順 評解・糸賀きみ江 古典集成による）。

本文

連夜のくいな

二八 あれはてゝさすこともなきまきのとをなにとよかれすたくくひなそ

諸注

連夜―毎晩（村井）。くいな―水鶏は渉禽類、水辺に住んでいる。その啼き声が戸をたたく音に似ているので、水鶏がたたくという（本位田）。連夜のくいな―毎夜鳴く水鶏。『林葉集』（俊恵）に「連夜水鶏 同（歌林苑） 知りながらとふをば知らでなほ叩くひなを幾夜わがはかるらん」とあるほか、『教長集』『林下集』（藤原実定）にも同趣の歌が見える。同一の機会という可能性がある（久保田）（石川）。さすこともなき―「さす」は錠をおろす（本位田）（村井）（久保田）。錠をさすこともない（石川）。まきのとを―「真木の戸」は檜・杉・松などの粗末な板戸（糸賀）。「まき」の「ま」は、美称の接頭語。「まき」は多くヒノキをいう（村井）。粗末な戸（石川）。なにと―どういうわけで。どうして（本位田）（村

井)。よかれず―夜離れずの意。毎晩休まず。恋の趣で、男が毎晩休まず通ってくることに用いられることが多い。この歌は男を待つ女の発想（本位田）（糸賀）（石川）。夜通ってくることをやめず。水鶏はその鳴き声から、恋人（男）の音ないにたとえられることが多い。「内にくひなの鳴くを、七八日の夕月夜に、小少将の君 天の戸の月の通ひ路ささねどもいかなる方に叩くくひなぞ」（紫式部集）（久保田）。たゞく―水鶏の鳴くこと。戸をたたくように鳴くからいう（村井）。男の訪れを思わせる（石川）。

口語訳

毎晩鳴く水鶏

二八 世間から忘れられ、今はもうすっかり荒れ果てて錠をおろすこともしない家の粗末な槓の板戸だのにそれにどうして毎晩休むこともなく、たれかが訪れて来でもしたように戸をたたく水鶏なのでしょう（本位田重美 全釈・糸賀きみ江 古典集成による）。

本文

我にちきり人に契恋

二九 たのめおきしこよひはいかにまたれましところたかへのふみみさりせは

諸注

我にちきり人に契恋―私に約束し、同時に他の女性とも約束する恋、という題意（糸賀）。「我にちきり」は自分とも関係し、人とも関係している恋（村井）（石川）。自分と自分以外の女性と、二股かけて約束している男との恋。当然女性の立場で歌う題（久保田）。たのめおきし―必ず行くといつて当てにさせておいた（本位田）（石川）。「たのめ」は下二段活用の連用形で、あてにさせる（糸賀）。男があ

てにさせておいたの意。「たのめおき」で一つの複合動詞（村井）。いかにまたれまし―「みさりせは」と呼応して、反実仮想となる。

どんなに待ったであろうか（石川）。ところたかへのふみ―お門違いの手紙。届け先の違った手紙。『枕草子』一三六段に、「人でもいだし求めさすれども失せにけり。怪しがりいへど、使のなければいふかひなし。所たがへなどならばおのづからまたいひに來なむ。」また、『信明集』には、「うきことも聞えぬものをうき島は所たがへの名にこそありけれ」とある（本位田）。別の女の所へ持つて行くべき文を、使いのものが間違え、自分の所へ持つてきたのだ（村井）。ほかの女性宛の手紙。その内容は今夜訪れるといったもの。

使いの者が誤配したという状況（久保田）（石川）。「玉章はところたがへもあるものをかならず北に帰る雁がね」（信実集）（石川）。

『源氏物語』夢浮橋の巻に、俗世の人間関係を断つて仏によりすがろうとしている浮舟が、薫君からの手紙を見て「今日は、なほ、持て参りたまひね。所違へにもあらんに、いとかたはらいたかるべし」と返事を拒む個所がある。待つ女のイメージを髣髴させる物語的発想による歌（糸賀）。

口語訳

二九

私に約束し、同時に他の女性とも約束する恋男が自分の所へ来ると、あてにさせておいた今晚は、どんなに待たれたことだろう。もしお門違いの手紙を自分が見なかったら（村井順 評解による）。

おわりに

今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』を国文科共同研究の対

象にふさわしものとして翻刻作業をしたのは平成元年六月から七月にかけてであった。この翻刻作業の過程で三百五十余りの書き入れ、夥しいミセケチ、検討を要する校合等が出てきた。これらの考察を「宮崎女子短期大学紀要第二七号・二八号・二九号・三〇号に「今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ（一）（二）（三）（四）」として発表した。この考察の過程で、多くの研究資料にご教示いただいて理解を深めることができた。感謝の念でいっぱいである。今回は「書き入れ」研究の考察過程でご教示いただいた諸注の集約を試みた。

使用文献

- 本位田重美著『評註 建礼門院右京大夫集全釈』（武蔵野書院 一九七四）
- 久松潜一校注『日本古典文学大系八〇 平安鎌倉私家集 建礼門院右京大夫集』（岩波書店 一九六四）
- 久高高文著『建礼門院右京大夫集』（桜楓社 一九六八）
- 井狩正司著『建礼門院右京大夫集 校本及び総索引』（笠間書院 一九六九）
- 村井順著『建礼門院右京大夫集評解』（有精堂 一九七二）
- 草部了円著『世尊寺伊行女 右京大夫家集』（笠間書院 一九七八）
- 糸賀きみ江著『新潮日本古典集成（第二八回）建礼門院右京大夫集』（新潮社 一九七九）
- 久曾神昇著『昭和美術館蔵 伝津守国夏 建礼門院右京大夫集と研究』（ひたく書房 一九八二）
- 今井卓爾監修『建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むきが記』（勉誠社 一九九〇）

- 大原富枝著『朝日人文芸文庫 建礼門院右京大夫』（朝日新聞社 一九九六）
- 久保田淳 校注・訳著『新編日本古典文学全集 四七 建礼門院右京大夫集・とはすがたり』（小学館 一九九九）
- 谷知子校注『建礼門院右京大夫集』（『和歌文学大系 二三 式子内親王集・建礼門院右京大夫集・俊成卿女集・艶詞』明治書院 二〇〇一）
- 平林文雄編『九州大学附属図書館細川文庫蔵 建礼門院右京大夫集』（和泉書院 一九八六）
- 共同研究 後藤多津子 田中司郎 塚本泰造 原田真理 今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』翻刻（宮崎女子短期大学紀要 第一六号抜刷 一九九〇）
- 田中司郎 今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ（一）（二）（三）（四） 宮崎女子短期大学紀要 二七・二八・二九・三〇号抜刷）